

## 退任記念「最終講義」

## いのちの始まりと人を育むこと

永見 勇

## いのちの始まり

私たちのいのちはどのように始まったのでしょうか。ある人は言います。それは自分の母親と父親の出会いがあり、そして結びつきがあったからだ。確かに。私たちの両親の結びつきがなければ、私たち一人一人のいのちはこの世にはありません。科学は、そのいのちの誕生を女性の卵子と男性の精子の結びつきから説明するでしょう。

女性は生まれたときから、40万個前後の卵子を卵巣に持っているといわれます。女性が思春期を過ぎますと、女性ホルモンの働きによって、4週間に一度程度の割合で、卵巣から卵子が排出され、その卵子が男性の精子と出会えば、女性は妊娠するというわけです。もし、出会わなければ、月経が起き、そのサイクルを月に一度、繰り返すのが一般的です。

一方、男性は男性ホルモンが活発になる思春期時代に睾丸の精巣で精子が現れます。この精子は毎日次々と現れますが、それらは精管という場所に一時、蓄えられます。精管に蓄えられた精子が、何らかの刺激で、外に放出されると、いわゆる射精と呼ばれる現象が現れるのです。一回の射精で1億個から4億個の精子が放出されると言われていますが、その中の一個が排卵から現れた卵子と結合するときに、妊娠という現象が現れます。この現象が現れた後、約十月十日の月日を経過しますと、ベビーの誕生となるわけです。

以上の説明は、既に学ばれたことがあるのではないのでしょうか。私は、今回、妊娠の科学的メカニズムを説明するために、この議論をしているわけではありません。こうした科学的メカニズムを通して生まれてきたとされる私たち一人一人のいのちは、実はもっと複雑で、神秘的な技の介入によってこの世に現れ、生きていることに気づいていただくために語っているのです。

「ある特定の精子と特定の卵子の結合で生命が現れるというけれども、誰が何億個の精子の中か

ら一つの精子を選び、その精子とたまたま排卵してきた卵子を結合させるのだろうか」と問いかけたといたします。皆さんはおそらく、「そんなことは分かりません」と答えるのではないのでしょうか。素直な答えです。でも、皆さんの多くは、自分の意志や決断によって、自分の身に起きる様々な事柄を決定できると考える傾向にないのでしょうか。自分の意志で選んだ男性と交わり、妊娠を経験する。そして自分のベビーが生まれてくる。そう思えば、妊娠という現象は、性的行為に関わった女性と男性の両者の意志と決断によって基本的には現れることになります。この立場からは、人間の意志によって子供は生まれると考えても不思議ではありません。

科学は人間の生命の現れを卵子と精子の結合によって説明いたします。様々な卵子と精子という要因が子どもの誕生という結果を生むというわけです。科学のこうした知識は、人為的操作を通して生命を生み出す道筋に導くことがあります。時に、人間の意志によって精子と卵子を人為的に結合し、結果として、受精卵を作成するという考えが現れることもあるのです。事実、この考えをもとに人間が卵子や精子を操作して人間を生産するという、いわゆる、クローン人間の誕生という考えが現れたのです。

私たちの多くは、クローン人間の製造と聞くと、即座に拒絶反応を示すのではないのでしょうか。人為的に製造するクローン人間の誕生を私たちはなぜ望まないのでしょうか。この問いには、科学という物差しだけでは把握できない、何かが関与して私たちの生命が現れことを暗示いたします。

科学は、人間の生命の現れを精子と卵子の結合やDNAの仕組みで説明いたしますが、なぜこの私が、13世紀のアフリカではなく、20世紀の日本社会に生まれたのかという問いには答えることはできません。なぜ、自分はこの母親とこの父親の

もとで生まれてきたのかという問いにも答えることはできません。私たちは、それぞれある特定の文化と歴史を持った社会の中で、独自の身体と才能を与えられて生まれてきます。そうした一人一人に与えられた人としての独自のあり方の現れを科学は説明できるのでしょうか。最近、科学は、DNAの仕組みを通して人間一人一人の仕組みを説明できると主張することがあります。しかし、ある特定の場所と時間の流れの中で、特定の人間と出会い、そして日本人として生を受けるというその人間のあり方は科学では説明できません。なぜなら、人間の生命の誕生には、科学という営みを超えた運命と呼ばれてきた神秘なる技や、出会いと呼ばれる人間の意図せざる力が関与しているからです。

人は、運命という力の媒介を通して、あるいは、出会いという自らの意図を超えた力の中で、自らの意志を働かし、自己自身になるのです。私たちは、それぞれの意志や理性の働きに関係なく、自らのいのちが与えられ、そして両親や兄弟や姉妹と出会うのです。母親も皆さんが誕生したとき、あなたという個的な存在を自らの目と皮膚の感覚を通して感じ取り、自分の子どもとして受け入れるのです。よくよく考えてみますと、母と子どもの出会いは神秘的な力を通して実現するということでしょう。私は、母と子の出会いは人知を越えた力を通して実現するという意味で、宗教的意味を深く帯びた出会いだと思っています。英語で「私が生まれた」ことを”I was born”という受動形で表現するのは、生命の最初の現れに神秘なる技が深く関係して「私が生まれる」ことに気づいたからではないでしょうか。

私たちの生命の誕生には、私たち人間の意志が関与できる面とそうではない面とがあります。人為的なものを超えた力、神秘なる技がまず私たちのいのちの現れに関与し、そのいのちが成長する過程で、自我意識が生まれ、次第に、その意識が自らのいのちの成長に関与していくというのが私たちのいのちの歩みではないでしょうか。もし人間の意志とそれを超えた力との関連で一人一人の人間のいのちが育まれ、成長していくのだとするならば、生命を育む営みとして理解される保育にも、人間の意志や社会の働きが重視される側面

と、運命とか神秘なるわざと呼ばれる力との関連で保育の営みを考える側面があると思うのです。

### 保育するところ：社会との関わりで

私は、以前、本学の紀要で、「保育とはどのような営みを意味するのか」という論文を寄稿したことがありました。その論文の抄録は以下のように述べています。

本稿は保育の意味を二つの視座から捉え、その二つの意味をどのように関連づけ、意味づけるかを問いかけている。すなわち、科学的視座から把握する保育と、人と人との関係としての保育の立場から理解する保育である。科学的視座からの保育理解は、社会の制度的秩序を護り、社会人として段階的に成長すべき人のあり方に関わる保育理解の傾向が強い。それに対して、人と人との関係としての保育は、一人一人の子どもの存在の重さを把握する保育であり、それ故、曖昧で、多義的、かつ時間の流れで変化する動態性としての人のあり方に根ざした保育理解である。この二つの保育理解は、ときに論理矛盾を引き起こす可能性を持つ。科学的流れからは社会共通の営みや秩序という考えが色濃く出てくるが、人と人との関係からの保育は、秩序や共通という考えを離れ、一人一人の子どもに着目する必要があるからである。これら二つの保育の営みの構造的枠組みを吟味しながら、どのような場合、科学的視座からの保育が要求され、どのような場合、人と人との関わりとしての保育が求められているのかを問いかけた内容になっている。(名古屋柳城短期大学 研究紀要 vol.28 p.1-11)

「科学的視座から把握する保育と、人と人との関係としての保育」という二つの保育の営みはいったい何を意味するのでしょうか。この問題を一人一人が社会の中で成長する過程で要求される保育の営みと生命の誕生の神秘性の二つの視点を交えながら、考えてみたいと思います。

私たちは、自分自身を他者に紹介するとき、どのように紹介をするのでしょうか。まず第一に自分に与えられた名前を通して自分を紹介することでしょう。それから、どこかの学校に通っていると

か、家族構成との関連で、自分は長女だと言ったり、自分の将来の関心事を語って自分を紹介いたします。こうして私たち一人一人が、生まれ育った社会環境に深く関係しながら、自己紹介が生まれます。

私たちは、自分自身を表現するとき、セルフ・アイデンティティー (Self Identity) という言葉を使用することがあります。この言葉はもともと、エリック・エリクソンという人が使った言葉だといわれていますが、一般に「自己同一化」と訳すようです。なぜ自分自身の存在を自己同一化といった言葉で表現するのでしょうか。それは自分自身を自分以外の何かと同一化 (identify)しながら自己を理解し、表現するからだだと思います。多くの人は、自分自身のあり方を「自己同一化」といわれても、それが何を意味するのかははっきりしませんが、皆様が、自分のことを、名古屋柳城短期大学の学生といたり、何々家の長女とって紹介しますと、明らかに名古屋柳城短期大学という社会制度や学生や長女といった一般化された役割と自分自身を同一化しながら、紹介していることが明らかになります。それだけではありません。日本社会が当然視するマナー、道徳などの規範体系や価値体系を学習し、それらを自らの意識に取り込みながら、自己自身を理解し、自分自身になってきたことに気づきます。

日本社会は、長い時間をかけて様々な制度や役割を構築してきました。衣食住に関わる慣習を構築し、それらの慣習を円滑に行うための道徳や宗教、あるいは政治や経済の仕組みを構築してきました。そうした長い歴史と文化を持つ日本社会で生きていくためには、どうしても社会が作り上げてきた慣習を学習し、政治や経済の基本的な仕組みを学習しなければいけません。なぜなら、そうした慣習や制度を学ばず成長していきますと、日本社会で育ってきた多くの人が当然と受け入れている行動パターンや規範性と乖離した行動を示す可能性を持つからです。あるいは、日本社会が暗黙のうちに要求する国民としての義務や価値規範を実行できなくなるからです。もし、ある人が日本社会で当然として受け取られている常識や行動規範にそって生きていくことができなければ、多くの場合、その人は、日本の多くの人々から相

手にしてもらえず、浮いたパーソナリティとして距離をとられてしまう危険が生まれてくるでしょう。その場合、その人と社会には様々な軋轢が現れ、多くの問題が生まれてくる可能性があります。ですから、私たちは、その社会が当然視する様々な価値体系や制度、役割を自らの意識に同一化し、私たち自身と社会との間に存在する距離を調和と安定をもって維持できるように自分自身を確立しなければなりません。社会もまた、一人一人の子どもたちがその成長過程で、日本社会に適應できるようなパーソナリティを確立できるように様々な手助けをしていきます。自分自身を確立することを自己同一化 (self identity) と表現することはある意味、大変に理にかなったことだと思います。

皆さんは将来、保育士や幼稚園教諭になるために、様々なカリキュラムを学んでいます。ところで、これらのカリキュラムは厚労省が決めている保育の原理や文科省が決めている幼稚園教育の目標という指針に沿いながら、決められていることを知っていますか。これら両省が決めている指針を良く読んでみますと、一人一人の幼児が社会の習慣や価値、制度、役割に対する十分な理解と実行の技量を培えるように、保育士や幼稚園教師が健康で安全な環境の中で、人と人の信頼と愛情関係を持てるような保育と教育をしなければならないと謳っていることが分かります。

厚労省が設定する保育の原理と文科省の幼稚園教育の目標は以下のような内容になっています。

## 保育の原理

### (1) 保育の目標

子どもは豊かに伸びていく可能性をそのうちに秘めている。その子どもが、現在を最もよく生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うことが保育の目標である。このため、保育は次の諸事項を目指して行う。

ア 十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を適切に満たし、生命の保持及び情緒の安定を図ること。

イ 健康、安全など生活に必要な基本的な習慣や態度を養い、心身の健康の基礎を培うこ

と。

ウ 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にすることを育るとともに、自主、協調の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと。

エ 自然や社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の基礎を培うこと。

オ 生活の中で、言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり、聞いたりする態度や豊かな言葉を養うこと。

カ 様々な体験を通して、豊かな感性を育て、創造性の芽生えを培うこと。

(インターネットに掲載された日本保育新聞より抜粋)

## 幼稚園教育の目標

幼児期における教育は、家庭との連携を図りながら、生涯にわたる人間形成の基礎を培うために大切なものであり、幼稚園は、幼稚園教育の基本に基づいて展開される幼稚園生活を通して、生きる力の基礎を育成するよう学校教育法第78条に規定する幼稚園教育の目標の達成に努めなければならない。

- (1) 健康、安全で幸福な生活のための基本的な生活習慣・態度を育て、健全な心身の基礎を培うようにすること。
- (2) 人への愛情や信頼感を育て、自立と協同の態度及び道徳性の芽生えを培うようにすること。
- (3) 自然などの身近な事象への興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにすること。
- (4) 日常生活の中で言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり、聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにすること。
- (5) 多様な体験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにするようにすること。

(インターネットに掲載された日本保育新聞より抜粋)

多くの人々は以上に記載された「保育の原理」や「教育の目標」に触れて、それらの内容に問題を感じる人はあまりいないでしょう。保育従事者

が子どもに関わる際、基本的に守らなくてはならない子どもへの対応や倫理規範が書かれているのですから。本稿でも、これらの内容を批判するために、紹介したわけではありません。ここで紹介されている保育原理や教育目標自体は保育者にとって重要な内容が書かれていると思います。とすれば、なぜ文科省、厚労省の幼児に対する保育や教育目的をここで紹介するのかとする疑問が残ります。それは国家という立場から幼児の保育内容や教育目標を議論することの意味と問題点を考えてみたかったからです。

日本社会は様々な社会制度を確立しており、それぞれの制度はある目標なり、目的を持っています。制度には、その目標と目的を遂行するための行為体系と役割体系が存在いたします。例えば、学校は、未だ学習途上にある人に、教育を施すことを目的とする制度的場所です。大学の組織で言えば、学校の経営内容を決定する理事会が存在します。教育内容については学長をはじめとして、教授、準教授、助教という階層的な組織が存在し、その組織と役割を通して教えるという営みが活性化していくのです。学ぶ側は一年生、二年生など、学部の学生、修士過程や博士課程の大学院生など、やはり階層的な役割体系が存在します。私たちはそうした階層化されたシステムの中で日々の生活を送っています。私たちが日本社会で働き、生活をしていくためには、日本社会に存在する様々な社会制度や役割を理解し、その理解にそくして自らの行為を実行しなくてははいけません。こうした営みは社会が正常に秩序化されてはじめて実行可能になるのです。

社会が正常に秩序化されるためには、倫理・規範体系と言葉という二つの基本的な手段が要求されます。日本語という言葉を学習し、その言葉が当然視する様々な表現形態や意味を学習しなければ、私たちは日本社会で生きていくことは大変困難になります。こうした社会制度や役割の学習や道徳・倫理規範あるいは言葉の学習は、私たちが人として生きていくためにはどうしても必要なのです。国家が保育の内容を語るのとは、そうした社会が要求する道徳・倫理規範や役割体系を保育のレベルで語る必要性を感じているからだと思います。こうした文科省や厚労省の保育に対する語り

は当然に必要なことでしょう。しかし、私たちが保育の営みを一人一人の幼児のあり方から捉えていくとき、制度化した国家の語る保育内容をそのまま受け入れて良いのでしょうか。そこにはある問題が浮き上がってくるような気がするのです。幼児一人の一人の独自のあり方に対応する保育のあり方が見えなくなるという問題です。

国家が立派な保育内容を語れば語るほど、その内容に対応できない子どもの存在が浮き彫りになります。それだけではありません。時に、制度化した保育内容の語りはある子どもにとってはきわめて抑圧的な語りとなってしまう危険があります。こうした問題に気づきますと、制度的にまとめられた保育内容を全体で実行する前に、一人一人の多様な子どものあり方を今一度感じながら保育に関わる必要性に気づかされます。社会を維持するための倫理や道徳は必要です。しかし、同時に子ども一人一人のあり方に対応して保育を行うことも大切です。この二つの視座から捉えられる保育行為をそれぞれ大切にしながら、同時にその両者を関連づけ、統合しながら、保育の営みに従事することが必要ではないかと考えます。そうした多面的で、動的な保育行為の内容を決め、実行をする主体は国家なのでしょうか。今一度、私たち人間の生命の神秘性を思い起こしながら、保育の原点は何かを考えてみたいと思います。

### 保育の原点：生命誕生の神秘性との関わりで

私たちが保育に従事する第一義の意味は、子どものいのちを育み、一人一人の子どもの能力や健康状態に対応しながら健やかに生きていくための生活の場を整え、提供することではないかと思えます。しかし、子どもが言葉のある程度、学習した段階から、社会の中で暗黙の内に要求される基本的ルールを学習する必要が出てきます。人と人との関係の中で自らの意志や考えを伝えるには、そうしたルールの学習が必要になるからです。掟、道徳、エチケット、倫理、あるいは様々な制度のあり方や役割の意味を少しずつ、時間をかけて教え、一人一人の子どもが他者とコミュニケーションをとれるように導く必要があります。人と人が出会ったら、挨拶をすること、人に何かをしてもらったら「ありがとう」と、言葉で相手に感

謝の気持ちを伝えること等々。ある時間になると、ある決まったルールで集団で昼ご飯を食べることを学ばなくてははいけません。その内容は多岐にわたります。こうした営みを保育者は幼児に示し、教える必要があることはいうまでもありません。しかし、この視点はあくまで、社会制度を維持する視点から保育内容を考えたものであり、子ども一人一人のいのちの重みから考えた保育のありようとは必ずしもいえません。

厚労省は保育の営みを「十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を適切に満たし、生命の保持及び情緒の安定を図ること」と謳っています。この表現には、子どものいのちを大切にす姿勢が謳われているといいでしょう。文科省は幼児教育に従事する際、「健康、安全で幸福な生活のための基本的な生活習慣・態度を育て、健全な心身の基礎を培うようにすること」と謳っており、この内容も子どものいのちの大切さを指摘しています。しかし、これらの子どものいのちへの関わりは一人一人の子どものいのちを大切にするという視点から語られているのでしょうか。必ずしもそうとはいえないように思います。というのも、両省の保育のあり方は、社会制度を維持する視点、すなわち社会一般が守るべき規範倫理から、子どものいのちを大切にすることを語っているように思えるからです。ここには、一人一人の子どもの大切にするという態度と社会一般が遵守すべき規範倫理的態度という二つのいのちへの関わりが関係していますが、その両者の間には時に、大きな段差が存在することに気づくことが重要です。

「健全な心身の基礎を培うようにすること」という言葉はどのような意味を持っているのでしょうか。「健全な心身」という社会的レベルで一般化された言葉は、一人一人の子供が生まれながらに持っている異なった能力と身体性という視点からは、あまりなじみません。この言葉はある規範的意味を暗黙の内に帯びており、従って、その意味から「健全な心身を持った子ども」を育てることが重要であるといっているように思えるからです。そうした意味を帯びた保育の営みを、一人一人の子どものいのちという視座から考えるとき、ある大きな問題が浮きあがってくるのです。とい

うのも、社会的に理解される「健全な心身を持った子ども」は「健全な心身を持っていない子ども」を暗黙の内に区分けしてしまう恐れがあるからです。この区分けは社会の秩序の維持という視点から捉えるならば、やむをえない区分けかもしれません。しかし、一人一人の子どものいのちという点から捉えるならば、この区分けは、ある子どもにとっては理不尽な要求内容となってしまう危険があるのです。

社会の制度的営みから健全という考えを捉えていくと、どうしてもその考えが社会一般のなすべき規範としての性格を帯びてしまいます。その場合、その規範に従って健全な身体を有した子どもと健全でない身体を有した子どもという区分けが現れてしまいます。社会が目指すべき方向性という流れから考えますと、この区分けを一方向的に問題があると断定するわけにはいきません。しかし、この規範を強く主張していきますと、かつて日本が戦争中、日本国民としてとるべき態度と行為を語っていた頃の問題を思い起こしてしまいます。日本国民がとるべき態度を語った、その語りはいつのまにか国民と非国民という区分けを作ったことを思い出す必要があるでしょう。一人一人の子どもは社会で生きていくためには、社会の取り決めたルールや規範性に従って生きていく必要があります。その点では、厚労省、文科省の指針や目標は子どもを保育する上で必要な内容を指摘しているといえるでしょう。しかし、両省が掲げる言葉だけでは子どもへの保育のあり方は十全に示されているとは思えません。

すべての子どもの顔や形が違うように、一人一人の子どもは社会に対応する能力も、世界に反応する感性も違います。こうした多様な子どものあり方を倫理的規範、例えば健全な心身という規範に則して理解していくとどのようなようになるのでしょうか。社会が認める健全な心身をその成長過程で獲得できる子どもは良い子として判断されることでしょうか。反対にそうではない子どもはどうしても問題児として位置づけられる危険を持っています。良く耳にする「いじめられっ子」や「いじめっ子」という子どもの区分けの現れの一つの理由に、社会一般が良しとする価値を守ることのできる子どもとそうではない子どもという区分け

が関係しているように思えます。もちろん、いじめの原因はその状況状況で異なるでしょう。しかし、人間のあるべき姿を社会秩序の流れで、語れば語るほど、「いじめ」という現象は強く現れるのではないのでしょうか。健常児と障害児という言葉も同じことがいえます。文科省や厚労省のような国家を背景にしながら子どもの保育を語る立場は、一人一人の子どものいのちを十分に尊重する保育とは何か異質なもののように思えるのです。

最初に生命の現れは神秘的であると語りました。今一度、一人一人の人間の生命の現れの不可思議さを思い起こしながら、保育の理念を考えてみたいと思います。

マルティン・ハイデッガーという人は、人間の生命のあり方を「世界の内に存在する」とか、「世界に投げ出された存在」というように説明をしています。私たち一人一人のいのちは、人間の理性や意志の働きに関係なく、この世に神秘的に現れると言っているように思います。そのいのちは常に、ある特定の文化、社会と歴史を持つ世界の中で、特定の家庭環境の中で現れます。同時に、そのいのちはある限られた時間の流れの中でその営みを現します。このことは何を意味するのでしょうか。様々なことがいえますが、一つ忘れてはならないのは、人間のいのちの始まりは、人知を越えた神秘なる技を通して現れるということです。ですから、人間の制度と行為が強く関与する社会の流れだけではいのちの重みを十分に理解したとはいえないのです。人間はある程度の言語能力と思考能力を獲得した段階で、自分の意志に関係なくある特別な歴史や文化を持った世界、ある特別な家庭環境の中で自分が生かされ、生きていることに気づかされることがあります。その気づきは、同時に、世界の歴史や文化あるいは家庭といった諸々の社会・文化的営みは、どのような力によって生み出されたのかという問いへと導くことがあります。人類はこの力を様々な言葉で語ってきました。その多くは、この力を自然や宇宙といった存在との関連で語り、その語りとの関連で人間は自ら生きていくための究極的道筋を見だし、生きてきたと理解しました。宗教と呼ばれる現象は、いのちの神秘性の気づきと、いのちに限りがあるという人間の自覚から生まれてきたとい

えるのです。

人間は自らの存在を超えた力によって自らの存在を理解し始めますと、私たちが日常、理解する人間理解とは異なった人間理解が現れます。日常生活においては私たちは、階層化された様々な社会組織や役割との関連で人間を理解する傾向にあることは話をしました。しかし、宇宙的枠組みで人間のあり方を理解し始めますと、私たちが権威あるものとして理解してきた階層化された日常的社会価値は、あまり意味をなさなくなることがあります。というのも、宇宙的枠組みで人間を理解するということは日常生活の流れそのものを超えて問いかける自分の生と死のあり方やいのちに限りのある有限的あり方が深く関わっていくからです。さらに生と死の流れを通して人間のあり方を理解していきますと、社会的レベルで権威化された組織や役割が意味をなさなくなり、相対化されてしまいます。

人間が自らの存在を支え、同時に超えた力を宇宙との関連で理解し始めますと、宇宙という広大で無限な力が個々の人間を圧倒することがあります。そのことで、人間はその宇宙的力に聖なる意味を感じ取り、その意味を通して生かされ生きているという感覚が現れます。この感覚はまた、自らの存在が極めて小さな存在であるとする感覚を生むことがあるのです。この感覚は人間はすべてが弱き存在という感覚を生み出します。しかし、この感覚は同時に、人間の一人一人のいのちはその広大な宇宙の力によって支えられているという自覚へも導くことがあるのです。一人一人の人間は何物にも代え難い尊い存在であるという人間理

解は、この感覚を通し生まれていくものと考えます。保育に従事する者は、この相反する二つの人間理解をまず自覚することから保育や教育の営みに従事していく必要があるのではないかというのが私の主張です。

### おわりに

保育教育の原点を宇宙的視座から捉えるとき、一人一人の子どもは何物にも代え難い生命の重みを持っているという考えが生まれます。保育者は、この考えから子どもに関わっていくことが極めて大切だと考えるのです。その関わりが、一人一人の幼児が示す異なった動作の重みを感じ取り、その動作の流れを通して一人一人の幼児の身体が自由に働ける環境を作りたいとする感覚へと導けばすばらしいことです。この関わりを維持しつつ、しかし、その時間の流れで、社会人として生きていくための様々な手段を徐々に、一人一人の幼児が持っている能力と反応に即しながら伝えていくという保育態度を醸成することが重要だと考えます。このような保育の態度は国家や学校が決定する保育内容から生まれるのではなく、保育に従事する一人一人の自覚に促されて現れてくるものと思います。保育を社会的営みのレベルのみ捉えてしまいますと、以上のような保育理解は生まれてこないように思います。本学がキリスト教の理念にそくして保育をすることの意味は、幼児に社会的意味を伝えたり、社会人として守るべき規範を教えると言うことの前に、一人一人の子どもの人格を受け入れるというその態度から始まるのではないかと思います。

## **The beginning of human life and the nurture of children**

Nagami, Isamu\*

文科省や厚労省は幼稚園教育の目標や保育の原理を謳い、その内容に則したカリキュラムを設定している。保育士志望の学生はそれらのカリキュラムの受講を要求されている。国が設定する保育の理念は社会における幼児のあるべき姿を達成するための理念や価値を記述しているのではないか。社会を秩序立てようとする立場からは、それらの理念は理解できる。しかし、人間一人一人の生命の始まりと、生命の神秘性という立場から保育の原点を考えるならば、幼児教育の原点は一人一人異なった能力と感性を持った子どもの多様性をまず認め、そのいのちの多様性を育むことの重要性も確認しておく必要がある。そのことを本稿で議論した。

本学が主張するキリスト教教育の原点は社会における幼児のあるべき姿を育むのではなく、一人一人の人間の生命の神秘性とその多様性を尊重し、生命を育むことにあると思われる。

キーワード：いのちの始まり，神秘性，国家，倫理規範，何物にも代え難い尊い存在